

此外にも櫻樹を祭りて、木花開耶姫とするは、駿河の富士淺間もおなじ、一宮紀に見えたり、神名式に、甲斐國山梨郡金櫻神社、在金峯山三代實錄に、貞觀七年十二月廿日丁卯、令甲斐國於山梨郡致祭、淺間明神とあるも、皆伊勢朝明郡布自神社、櫻神社と同じく、一體一神なり、此櫻樹木花開耶姫を王仁はよみたるなり、故に萬葉集第二十に、

櫻花今盛りなり難波の海おしてる宮にきこしめすなへ

是は王仁が難波津に開耶木花の歌をふくみてよみたるなり。○略 中 櫻は此邦山野自然生の樹にして、木花開耶の轉音なり。サクラ 一說に咲簇サキクラ の訓ともいふ。キムノ最初花を名付けて賞美せり。○反ク

略

〔玉勝間四〕櫻を花といふ事

たゞ花といひて櫻のことにするは、古今集のころまでは聞えぬ事なり、契沖ほうしが餘材抄にくはしくいへるがごとし、源氏物語若葉上の巻に、梅の事をいふとて、花のさかりになるべく見ばやといへる事あり、これらはまさしく櫻を分て花といへり。

〔大和本草十二〕櫻 文選沈休文早發定山詩、山櫻發欲然、註果木名、花朱色如火欲然也、王荊公詩曰、山櫻抱石映松枝、司馬溫公ノ詩ニ曰、紅櫻零落杏花開、是中華ニ櫻ト云ハ朱花ナリ、日本ノ櫻ト云物ハ中華ニ無之由、延寶年中長崎ニ來リシ何清甫イヘリ、若アラバ中華ノ書ニ記シ、詩文ニ述作シ、賞詠スペキニ、此樹ナキト云ハ實說ナルベシ、朝鮮ニハアリ、昔年朝鮮ヨリ漂來ル舟ノ蓬桁ニシタルヲ見ルニ、疑ヒモナキ本邦ノサクラ也、奈木ト云ヘリ、其花ヲ問シニ、朝鮮ノ客答テ、二三月淡紅白花ヲ開ク愛スベシトイヘリ、中華ニハ梓ヲ以書ヲ刻ム、日本ニハ櫻ヲ用ユ、木堅クシテ良材ナリ、凡土宜ニヨリテ品物有無ナリ、是自然之理ナリ不可疑此木百年ノ壽ナシ、處々ニ刀ニテ皮ヲタテニワルベシ、榮ヘテ命長シ、日本ニ昔ハ梅ヲ花ト云、中世以來櫻ヲ花ト云、日本ニテ花ヲ